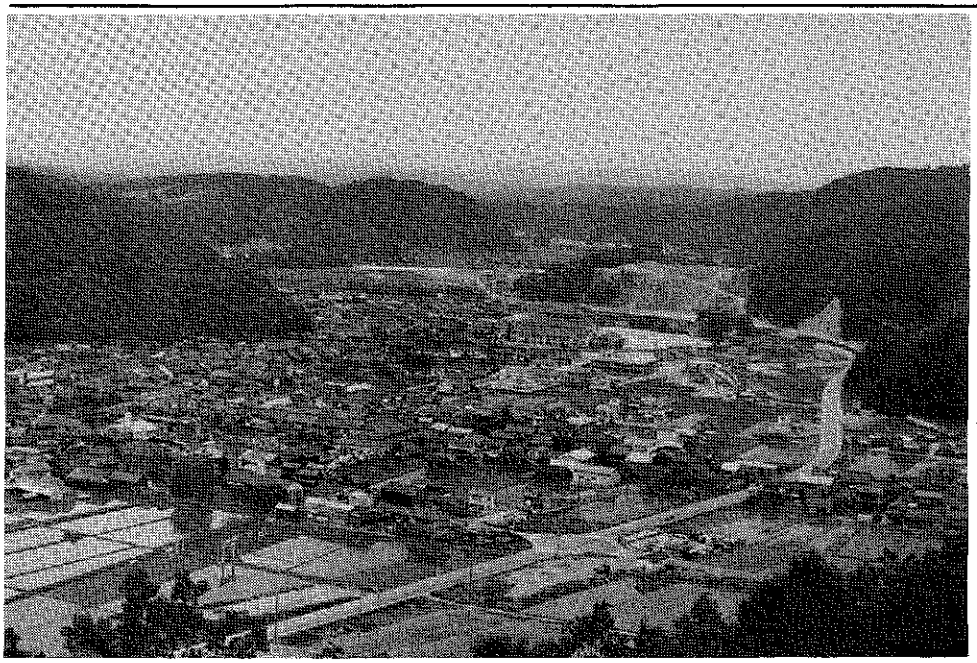


双三郡吉舎町の全景

四本

第3号

昭和49年5月1日発行
発行人
得能長絃
編集人
永井又太郎
印刷所
広島県双三郡吉舎町
佐々木印刷株式会社

学術講演

癌の化学療法について

広島大学原医研外科
服部孝雄教授講演より

現在の抗癌化学療法は多剤併用療法が主流となっている。

その構成は、癌腫の種類及び担癌個体の差異によって変化するのが当然であるが、表1(II)が最も使用されている多剤併用療法の型である。最近は Cytosine Arabinoside (CA); (B)キロサイドが追加して注目され、MFC療法を行なう機会が多くなった。構成は体重50kgの人でMMC 4mg. 5—FU500mg. CA40mgを週一～二回投与して一〇回投与を目標としている。

この様に、いろいろの組合わせができているが、抗癌化学療法の開発については、既に限界に来ているように思われ、日本で開発されて二〇数年の歴史をもつMMCが今なお、これらの組合せの内で必須のものとなっているのも、この事実を物語っておるようで興味深い。

さて、実際に以上のようなスケジュールで化学療法を開始しても、その副作用特に白血球減少症、或いは無顆粒血球症等に悩まされ、副作用防止法も試みてはいるが結局中途で挫折することが多い。

しかし本療法の成功のこつは、たとえ副作用が出現しても抗癌剤投与の間隔を広くするとか、副作用症状を治療して最初のスケジュールに復帰せしめるといった何らかの方法を講じて決して中止することなく目標投与量に達することである。

副作用防止を目的とした併用療法には VitB6 大量、ステロイド、グルタチオン投与等々具体的に多くの方法が行なわれている。しかし今回は本療法の将来的展望を含めたいわゆる療免疫療法という言葉があるが、この定義はともかくとして、この範疇にあると思われており、かつ現在原医研外科で施行している方法を二つ紹介してみたい。

その一は、骨髄移植である。本法は血液学的副作用に特に有効であって、無顆粒血球症でも本法を施行すると約一週間で正常像に回復する。しかしながら本法にも大きな問題が絡らんでいる。それは骨髄提供者が全身麻酔下で手術され、しかもかなり創面が大きいことと、被移植者が担癌患者であることから当然予後のことが考慮されるため、本法が普及しない要因となっている。

その二は、細菌免疫学的製剤である。既に欧米ではBCG製剤を併用して有効であったとの報告があり、原医研外科では溶連菌製剤であるOK432を併用して制癌効果に高い成績を得ているが、今後は此の種の製剤が次々と開発され実用化されてゆくことが期待される。

表1

Schedule of Chemotherapy of Cancer

I. Agents	Usual Dose	Total Dose
A. Mitomycin C	0.16～0.20mg/kg×1～2week	60mg～
B. Cytoxan (Endoxan)	8.0mg/kg×2/week	6000mg～
C. Trenimon	a) 0.004mg/kg/day	6.0mg～
	b) 0.02mg/kg×2/wsek	6.0mg～
D. 5-FU	a) 15mg/kg/day (5 days)	
	b) 7.5mg/kg/day when the side effects was observed	
E. S-261	4.0mg/kg/day	
F. Chromomycin Hemi-succinate	a) 0.03mg/kg/day	
	b) 0.06mg/kg/day	
	c) 0.1mg/kg/day	

II. Combined Treatments		
A. VAMT-I		
a) Vincristine	0.02mg/kg×1/week	
b) Cytoxan (Endoxan)	4.0mg/kg	in Combination×2/week
c) Mitomycin C	0.04mg/kg	in Combination×2/week
d) Chromomycin Hemisuccinate	0.02mg/kg	in Combination×2/week
B. VAMT-II Cyclic Administration of a) b) c) d)		
C. FAMT-I		
a) 5-FU	10.0mg/kg	in Combination×2/week
b) Cytoxan (Endoxan)	4.0mg/kg	in Combination×2/week
c) Mitomycin C	0.04mg/kg	in Combination×2/week
d) Toyomycin Hemisuccinate	0.02mg/kg	in Combination×2/week
D. FAMT-II Cyclic Administration of a) b) c) d)		

ずいひつ・随筆・ずいひつ・随筆・ずいひつ・随筆・ずいひつ・随筆

随筆　ずいひつ

五十年の思い出

中村重孝

私は今春図らずも県医師会から開業五十年を祝っていただき身に余る光栄とありがたく感謝しています。就いては巴杏編集の方から五十年の思い出を書けと依頼があったのですが、五十年という年月は随分と長い旅路でありますのであの時この時と回顧しますと思い出も沢山あります。

開業当初は農家の経済力も衛生思想も低かったので一寸した病気でも往診を求められたものです。往診するといっても自転車で往ったのですが道は狭まいし坂が多いので大変難儀をしたものです。その後馬に乗ったりオートバイにと長年乗りましたが楽じゃありませんでした。今は往診するといっても自動車ですし、それにどんな家にでも自動車を持っていますから重症でない限り通院して来ますし、急病人が出ても連れて来ますから往診数は少ないし開業の頃から見ると夢のようです。

開業当初急性肺炎患者がありました。今のように抗生物質だのペニシリンがない頃なのでよく死亡しました。でも看護婦が付添っていて湿布をしたり強心剤を注射したものは助かったようです。この頃は三次にも看護婦会が二つもあって看護婦が大勢いたので頼めば直に来てくれました。強心剤はカンフルを出来るだけ回数多く注射するのでした。私は自家血液療法をやったのが一番効があったと思います。殊に幼児や小児には卓効があったと思います。この頃の民間療法としては肺炎には鯉の生血とか赤色のギギ（ギギはギギウとも言う川魚）とか甚しいのは金魚の黒焼をのませたものです。中には三次の照林坊で牛煮を買って来て服ませた家もありました。此等民間薬の中ではこの牛煮が効いたようです。そこで調べて見ましたら和漢薬考という本の中に牛煮は牛の胆石で特殊の成分は未詳だが沈熱利疼の効能ありと書いてありました。当時金の目方と同じ値段がしたといいます。

又この頃は祭とか結婚とか棟上げがあるとか何か賑やかな行事があるとそのあと決まったように腹痛患者が多発して天手古舞をしたものです。魚屋が前から買い留めをしておいて少々日が経ったものでも買って料理ししかもたまに食べるのでそれをたらふく食べたものだから中毒を起したのです。今は魚の鮮度をよく知っているし、毎日のように食べているので以前のような事はないのです。

肝硬変症で腹水のたまった患者をよく診ました。一斗入りのバケツ一杯と更に洗面器に溢れる程採った人もいました。

今は見かけませんが小児脊髄マヒや疫痢、ジフテリア者も毎年のように診療したものです。小学生にも中学生にもトラホームや女子の頭髪虱がいて困ったものです。昔も今も変らないのは神経痛患者の多い事でしょうか。

原爆の時にと救護班として直に行っておりますから思い出の中に大きく浮き上がってきますが、あまり長くなりますからこの辺で擱筆します。

くだらぬ事を長々と書いて貴重な紙面を汚しました事をお許しください。

二重人格

小川　泉

そろそろ頭が薄くなる年になったせいか近頃よく仲人をやらされる。又、可愛がっている娘達にも相次いで結婚話が持ち上がって来た。そこで考えることは、外見上すばらしいこの相手が万が一にも思いがけない反面がありはしないかという不安である。あんな立派な人に対して失礼な少々根性が悪いと思われるかも知れないが、それなりの理由がある。私の親しい友人は十七年間も忍耐したあげく結局この思わざる内面によって離縁せざるを得なかったし、その結果年頃の娘までおかしくなるという二重の賓苦に合っているのである。

そこまではなくても人には誰しも内面（うちずら）と外面（そとずら）とがある。ジキルとハイドとまではいかなくても本音と建前に相当な開きがあることに悩むものである。人間とは何ぞやと問いかける時、この複雑で矛盾に満ちた存在をいい表わす適当な言葉がなかなか見つからなかったのもこのためであり、哲学や宗教が生れたのもこの苦悩を解決せんと努力した結果であるといえるであろう。

医学を学んでいるということは実に有難いことである。このような難問が一見して分る気がするのである。それは人類の脳髄の構造がそのようになっているからである。事実教授の脳髄の機能によると、古い皮質と呼ばれる大脳辺縁系には本能と情動行動の中枢があり、これが我々にたくましく生きるエネルギーを与えている。一方、その上位にある新皮質系こそは、万物の霊長といわれる人類だけが持つすばらしく発達した大脳であり、殊にその前頭前野において最高次の精神活動が営まれるということである。

生きてる限り我々が本能と理性との板挟みに悩まされるのはこのような脳髄の二重構造を一つの頭蓋骨の中に入れて生きてるためであり、フロイドが呼んでいる根我（イド）と超自我（スーパーエゴ）の対立もこれによって理解されうるのである。

更にこの本能と理性との間の緊張関係の外に、前頭前野の学習による開発の結果、競争、野心、征服欲、殺しの論理が生まれてくるのも人類の悲しい宿命である。親友で恰好のライバルであった幼な友達を刺した三瓶の殺人事件にもその悲劇の一端を見るのである。

実に不可解なるは二重構造を持

消化器系鎮痙・鎮痛剤　Daipin
上腹部痛に制酸剤の効果持続に…
ダイピン錠®
一般名:N-メチルスコポラミン・メチル硫酸塩 識別番号106
Daipin
第一製薬株式会社 東京都中央区日本橋三丁目14番10号
CERM社(リオン・フランス)提携品

鎮痛・抗炎症剤
ノンフラミン®カプセル
一般名＝塩酸チノリジン　(単位当り￥28.00)
製造＝吉富製薬株式会社
販売＝武田薬品工業株式会社

ずいひつ・随筆・

つ人間の姿である。「わたしは自分のしていることが、わからない。

なぜなら、わたしは自分の欲する事は行なわず、かえって自分の憎む事をしているからである。わたしはなんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。」との聖人パウロの呻きが聞こえて来るようである。

今、我々に要求されるのは適当なる自己コントロールの力であり、フロイドのいう調和された自我（エゴ）の演出である。

調和能力こそは健康のシンボルといえよう。

会員紹介

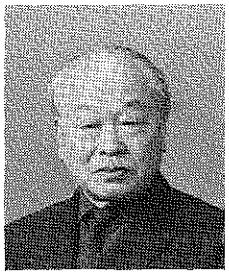
松島寿朗先生

明治二十七年三月一日生。
住所　双三郡三和町敷名二〇九四。
広島県衛生技師　細菌検査所主任を歴任。昭和二十四年二月開業。趣味は囲碁。
奥さんは健康であるが先生は、昭和四十四年六月より病いの為臥床。
六人の子息、一人の息女の持主。長男は名古屋市内の病院で内科医師として勤務。その他各方面で活躍中。

佐藤　博先生

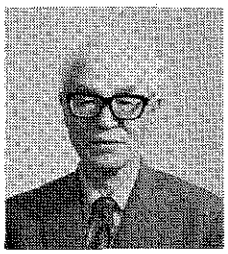
明治三十年十月二十日生。
住所　双三郡三和町上山。
大正四年三次中学卒業ですからまだ鉄道も開通せず、電燈も三次電気発電所が大歳に有りました。大正十二年十一月現地にて開業し、今満五十一年になります。
家族は妻と二人。後継者は妹の息子にて現在大阪の病院におります。趣味は、盆栽と時々旅行して余生を楽しんでおります。

中村重孝先生



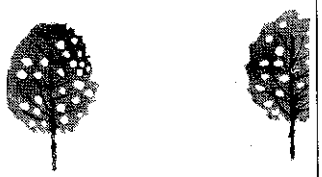
明治三十一年二月二十一日生。
住所　双三郡布野村上布野。
大正十一年東京医学専門学校卒業。大正十三年現地開業。今日に至る。
中村知己長男
九州大学医学部卒業。君田にて開業。昨年四月より父を助ける為、帰村月曜、木曜の二回君田村に出張。
中村実郎次男
東京医学専門学校卒業後、東京中野にて開業中。
他に四女あり、夫々嫁している。趣味は読書と旅行。

佐々木喬先生



明治三十二年六月十九日生。
住所　双三郡三和町字下板木
家族　現在同居家族無し。
次男　佐々木千之
昭和五年十二月生
（宮崎県立西都市商業高等学校勤務）
三男　佐々木公正
昭和十一年六月生
（大阪市武田薬品工業ＫＫ勤務）

医師会だより



昭和49年2月～昭和49年5月

2月6日(水)　特別委員会。午後五時。
場所　双三地区医師会館
出席者　得能会長・鳴戸・荒瀬両副会長・永井理事並びに全職員
協議事項
職員からの給与是正について要求あり、懇談形式で希望、意見を聴取交換す。

2月7日(木)　元双三地区医師会員瀬尾鉄郎先生の葬儀あり。故人を偲び関係者出席す。

2月20日(水)　第二回県下医師会立臨床検査センター連絡協議会。
場所　県医師会館
出席者　鳴戸副会長・長船理事・土岡所長・中西事務長。
詳細は、県医師会速報第七八〇号に掲載。

2月24日(日)　日本医師会医学講座
場所　双三地区医師会館
演題並びに講師
「老人患者の診療のすすめ方」
朝日生命成人病研究所循環器科部長。
東京大学内科講師　藤井潤先生
「最近における肝疾患の診療」
九州大学第三内科助教授　宇山干里先生
「救急時輸液の問題」
大阪大学特殊救急部　田中範明先生
「日常診療における神経疾患」
広島大学第三内科教授　鬼頭昭三先生
「産業医講習会」
司会　広島県医師会産業医部会長　右近文三先生
産業医の職能
広島労働基準局安全衛生課長　玉国英行先生
健康診断のすすめ方
東洋工業病院部長　浜田　豊先生

3月7日(木)　三次税務署出頭日程表を該当員に発送。

3月25日(月)　日曜当直に対しての意見調査表を該当会員に発送。

3月26日(火)　理事会。午後四時。
場所　双三地区医師会館
出席者　得能会長・鳴戸・荒瀬両副会長・横山・小川呆・中村知・田中・永井・長船各理事・星田議長。
1. 報告事項
(1)得能会長より2月16日の医師会長議会において、参議院選挙対策並びに尾道市、湯浅病院火災の件について詳細な報告あり。
(2)代議員会報告
3月24日開催された第60回定例代議員会に出席した鳴戸代議員・永井予備代議員より、概要を報告。殊に定例代議員総会の決議文並びに広島県医師連盟の声明文

の採択があった事を報告。同日第29回広島県医師会定例総会において、当地区より、中村重孝先生が開業50年の表彰された事は、特筆すべき事である。尚詳細は県医師会速報第七八二号、昭和49年5月15日（号外）を御参照ください。

一方、地域対策協議会の件は、三次市をモデル地区として検討したい意向があるらしいが、広大医学部が中心になって活動すれば地元医師会員は協力をする事に決定。

2.協議事項

(1)集配方法について、回数の増加、集配人の増員等話題となるも今後再協議する。

(2)還元金の使途について、慎重に検討する。

(3)精度の向上と能率を上げる為自動分析機を購入する事が決定。

(4)医師会館周辺の山林の一部を購入したい事には、一同賛成。

(5)職員の昇給の件

(6)昭和49年度一般会計、検査センター予算案の概要は、永井理事より説明あり、何れも承認される。

(7)監事会は、4月18日㈭に、定例総会は、4月25日㈭に日程を決定。

4月18日㈭　監事会・午後四時
場所　双三地区医師会館
出席者　吉光・大谷・石田各監事・得能会長・鳴戸・荒瀬両副会長・長船・永井各理事
柏村顧問税理士・中西事務長

(I)昭和47年度（自47・4・1 至48・3・31）

(1)一般会計の部
1.収支計算書
2.貸借対照表

(2)検査センターの部
1.貸借対照表
2.損益計算書

(3)用紙特別会計の部
1.貸借対照表
2.損益計算書

(II)昭和48年度（自48・4・1 至49・3・31）

(1)一般会計の部
1.収支計算書
2.貸借対照表

(2)検査センターの部
1.貸借対照表
2.損益計算書

(3)用紙特別会計の部
1.貸借対照表
2.損益計算書

以上の件を柏村顧問税理士より詳細な説明があり三名の各監事の厳格なる会計監査の結果、本決算書に関する諸帳簿及び証憑書類は、正確妥当である事が認められた。

4月25日㈭　午後三時
双三地区医師会定期総会
場所　環翠楼本店
詳細は県医師会速報第七八七号を参照ください。

5月11日㈯　郡市地区広報担当理事連絡協議会
場所　県医師会館・岡部良哲理事出席。

5月14日㈫　丸茂参議員来館・県北二市四郡の医師参集。

5月16日㈭　第25回医学講演会・午後三時
場所　双三地区医師会館
演題「癌の化学療法について」
講師　広島大学医研臨床第二部門（外科）教授服部孝雄先生（抄録は本誌に別載）

5月22日㈬　第5回編集委員会・午後六時三十分
場所　石田無線二階会議室
出席者　田中・永井各理事・小川泉・箕岡・岡崎・岸田各先生中西事務長。
協議事項
1.表紙の写真掲載は、吉舎町方面とし、田中理事・岸田先生に一任する。
2.会員紹介・高年齢順に松島寿朗先生・佐藤博先生・佐々木喬先生・中村重孝先生とし、該当諸先生の家族写真や近況を掲載する。
3.随筆
中村重孝先生に開業50周年回顧談。
中村伸久先生にカメラ等について、御執筆を依頼する。
（編集会議後、中村伸久先生は投稿を御辞退され、小川泉先生に変更）
4.ブロックだより
東雲会（三良坂・塩町班）の歴史と近況を高場賢治先生にお願いする。
5.学会
第25回医学講演会癌の化学療法についての抄録を藤谷博義理事の世話で掲載する。
6.原稿の締切は、6月15日とす。
7.医師会だより・編集後記は永井理事が担当。
8.第3号の発行日は、昭和49年5月1日とし、会員には6月下旬に配布予定。
備考　御投稿下さる原稿用紙は四枚（一枚三〇〇字）程度とする。

5月25日㈯　午後六時三十分
脂質代謝に関する講演会。
場所　双三地区医師会館。
演題　「高脂血症の診断と治療」
講師　広大医学部第一内科講師　梶山梧郎先生

5月30日㈭　学術講演会・午後七時。
場所　双三地区医師会館。
演題「ベットサイドの心臓病の診かた」
講師　広大医学部第一内科助教授　吉田正男先生

永井記

編集後記

入梅も過ぎやがて炎熱の候も間近い事と思います。毎度のことながら発行が大変延引致しましたがここに第三号をお届け致します。どうも原稿の御投稿が少ない為に編集に至難を極めております。何卒御賢察下さり、今後よろしく御協力の程を重ねてお願い申し上げます。

本号には、殊に中村重孝先生より貴重な五十周年回顧録を賜わり、日進月歩する医界の中にあって、地域住民の為に御献身下さっていた姿が推察され、我々の範とすべく心から感謝いたします。

向暑の砌、会員御一同の御健康と御多幸をお祈り致しております。

永井記

抗動脈硬化剤
抗キニン性・抗遅延型炎症反応因子性
血管透過性亢進阻止剤
ANGININ

BANYU PHARMACEUTICAL CO.,LTD

新炎症・腫脹緩解酵素剤
ダーゼン®錠
「タケダ」
消炎、膿・血腫・粘液融解
武田薬品工業株式会社